



創立100周年記念事業

「中央分水嶺踏査登山」本格スタート！

中央分水嶺踏査委員会

日本山岳会の創立100周年記念事業のひとつで国内登山の部の「中央分水嶺踏査登山」については、その計画概要と支部の取り組み状況について、すでに会報704、705号で報告しました。そして、この事業を本格的に推進するために、去る2月21日(土)の午後、水道橋のグリーンホテルで、この企画の提案元である科学委員会との共催で、本計画の意義を深めるとともに周知することを目的として、シンポジウム「中央分水嶺踏査について」を開催しました。また、翌22日(日)には、本計画の

円滑な実施に向けて、分水嶺支部担当者会議を開催しました。一部準備が遅れていた支部もありましたが、各支部とも責任をもって積極的に取り組むとの意思表示があり、いよいよ準備から実行へと本格的なスタートを切ることになりました。首都圏で担当する2区間についても、同好会などによる分担がすでに決まっており、具体的登山計画を持ち寄って、3月22日(月)に首都圏の担当者会議を開催しました。

今回の100周年記念事業は、全員参加をモットーとし、一部区

2004年(平成16年)

4月号(No. 707)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目次

100周年「中央分水嶺踏査登山」	
本格スタート……………	1
ポカラ国際山岳博物館開館式…	4
アメリカ山岳会での講演…………	5
100周年ニュース……………	8
海外の山……………	9
報告……………	10
図書・水野勉氏講演会／学生・	
アイスクライミング講習会／	
事業・スキー懇親会	
東西南北……………	12
水越武写真展とフォスコ・マ	
ライーニ氏の近況／シュラギ	
ントワイトのパノラマ図受贈／	
ウェストンと槍ヶ岳・日本海	
図書紹介……………	14
Climbing & Medicine……………	32
会務報告……………	16
テンギ・ラウ・タウ・シニア隊…	17
INFORMATION……………	18
図書受入報告・ルーム日誌…………	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10～20時
水・金…………… 13～20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10～18時

◎シンポジウムの報告

科学委員会・米倉 久邦

■はじめに

このシンポジウムは、中央分水嶺踏査事業の一環として、国土交通省国土地理院の後援を受けて開催された。当日は、一般の参加者のほか、実際に中央分水嶺を踏査

間については、会報およびホームページを通して、一般会員を対象に公募して参加を呼びかけることを予定しています。ふるって応募いただき、創立100周年事業に少しでも関与することによって、その意義を感じ取っていただきたいと思います。

以下に、シンポジウムおよび支部と首都圏の分水嶺担当者会議の開催報告を記します。

する全国各支部の代表も含めて約200人が参加した。

星埜由尚前国土地理院院長ら4人が中央分水嶺の意義や魅力などについて講演、その後のパネルディスカッションでも活発な意見交換が行われ、総延長5千に及ぶ分水嶺の踏査達成へムードは盛り上がった。

シンポジウムは科学委員会の箕岡委員が総合司会を務め、中央分水嶺踏査委員長石田要久理事が開催の挨拶をして始まった。

■基調講演

講演のトップバッターは今年1月に院長を退任したばかりの星埜氏。専門家の立場から、山岳会の宗合岬から佐多岬までの分水嶺踏査計画を評価、中央分水嶺の定義に多くの議論があることを紹介し

中央分水嶺踏査について

主催 日本山岳会 後援 国土交通省 国土院
パネル・ディスカッション
分水嶺についてあいひに語る

シンポジウム、パネルディスカッションで本計画の意義を再確認

た。

星埜氏は「水が別れるところが分水界、海をへだてるのが中央分水嶺とすると、北海道では知床半島を北端としてもいい。本州の中央分水嶺の始まりは津軽半島か下北半島か。これは陸奥湾が日本海か太平洋、どちらの海に付属しているかで見ると決まる」と述べ、さらに瀬戸内海や薩摩半島錦江湾の例を挙げて、「中央分水嶺と簡単に言うが、面白い奥の深い議論が出来る」と、この機会に分水嶺論議を深めて欲しいと要望した。

また、星埜氏は、分水嶺は「人々の生活や文化にも大きな影響を及ぼしている」と、その意味は単に

地理的なものにとどまらなさと指摘した。

次に、分水嶺研究に長く携わり、100周年記念事業として中央分水嶺踏査を提唱した科学委員会の近藤善則委員が「分水嶺の魅力と踏査の意義」と題して登壇。

分水嶺の魅力について、地理、地学、河川、森林、文学、歴史、生活文化、交通などあらゆる分野と密接にかかわっており、登山の対象としても興味深いテーマがたぐさんあると述べた。

近藤氏は、具体的なテーマを①気候や風土の境界の役割を強く感じるところや、植生、動物の観察などの自然系、②古道や峠の歴史上での役割、源流や三角点の観察などの人文系、③県や市町村の境界、鉄道、道路などの社会系と3分類して「分水嶺とのかかわりなくして列島を論ずることはできない」と分水嶺への思いを語り、「分水嶺には登山道のないところもある。日本山岳会のパイオニア精神を活かせる唯一の国内登山、全支部の鋭意を持って臨む価値のある行事ではないだろうか」と結んだ。

北海道支部長の新妻徹氏は、実

際に踏査をする立場からの苦勞を語った。北海道支部の担当は、全体の2割にもあたる総延長1065^キ。各支部の中でもずばぬけて長い。しかも、途中は積雪期でないと歩けないような難しいところも多く、踏査達成には強いリーダーシップと全支部員の努力が欠かせない。

新妻氏は、自らの北大山岳部時代からの登山経験などを披露しながら、分水嶺の調査山行を実施していることを説明。「中央分水嶺は、千歳空港のなかを走っている。これはどうしようかと悩んでいます」などとユーモアを交えながら、踏査をやり遂げるとの決意を表明してくれた。

最後に『日本の分水嶺』の著者堀公俊さんが「中央分水嶺、ここが面白い」と題して講演、「中央分水嶺は多彩な魅力を秘めている。分水嶺をはさんでしばしば植生、気候、風景、文化が大きく異なることがある。分水嶺を越えての人、物、情報の交流が日本の歴史を陰で支えてきたといってもいい。地理、地学的にユニークなポイントが多数ある。水源や観光資源として様々な形で私たちを潤し

ている」と分水嶺研究の楽しさや意義を語った。

さらに堀氏は、「分水嶺ハンター」として自ら歩いて調べたことを踏まえて、北海道、東北、関東中部、近畿、中国、九州の各地区に分けて、分水嶺をめぐる話題やトピックスを解説、「紹介できなかった興味深いポイントもたくさんあり、すべてを説明し尽くすことは困難。中央分水嶺の魅力の一端を感じてもらえれば本望です」と関西弁の楽しい話を締めくくった。

■パネル・ディスカッション

シンポジウムは休憩の後、「分水嶺について大いに語る」というパネル・ディスカッションに移った。最初に司会の森武昭・中央分水嶺踏査委員会事務局長が、計画内容や進捗状況を説明した。

森氏は、中央分水嶺踏査事業の目的として、①できるだけ多くの会員の参加、②パイオニア的精神を生かせる、③6千人の会員が連帯感を持てる、④IT時代にふさわしい企画を盛り込む、⑤科学的・文化的要素を盛り込む、の5点を強調、今年3月に登山計画の最終案を決定して、4月から活動を開始、来年10月の100周年記

念式典で報告をしたいと説明した。

また、藤本慶光総務担当理事から、「各支部からいろいろ要望も聞いているが、それだけ皆さんの関心も高い。一般の人も参加できるように、公募する区間を決めて公開していく。NTTドコモと提携して衛星電話で通話するなどのイベントも計画している」と補足説明があった。

討論会では、星埜氏や堀氏から山岳会の事業に「協力していきたい」「頑張つて欲しい」との言葉が寄せられた。

山岳会会員や一般参加の人から「個人的に分水嶺を歩いているが、昔の道や廃道になったところが目につく。そうした道の復活や登山道を新たに造るとかの啓蒙活動をどう考えているのか」「結構な企画だが、参加するにはどうするか。具体的な呼びかけは」などの質問が出た。

また、星埜前院長には、「地理院の地図の名称と地元の呼び方が違うが、どうしてか」「地図が間違っていることがある」などの指摘が出され、星埜氏は、間違いないように心掛けているが、廃道がそのままと例もあるとし、

現場からの情報提供に協力をお願いしたいと応じていた。

最後に日本山岳会の平山善吉会長が、「ぜひ、事故なしで計画を実行して欲しい。楽しい報告書ができるのを期待している」と挨拶、また、福山科学委員会委員長も、シンポジウムを100周年記念事業の役に立てていただきたいと述べ、終了した。

◎分水嶺担当者会議の報告

中央分水嶺踏査委員会

宮津 公一

2月22日(日)午前9時より、本部104室にて支部担当者会議が、前日のシンポジウム「中央分水嶺について」に引き続き開催された。各支部責任者26名、本部の中央分水嶺踏査委員側は、小倉顧問、石田理事はじめ10名と大勢の出席を得た。104室は机の二重配置となり、文字どおり立錫の余地なく、熱気あふれる審議が行われた。各支部とも、独自の考え方、諸事情もあって、当初は消極的な意見もあったやに聞いていたが、この日は、いずれの支部も担当区分について「任しておけ」との回答。どの区間とも、平均すると過半数

は登山道などなく、残雪期のみ、またはやぶこぎ専門等々の歩行困難区を抱えているにもかかわらず、支部単独、支部主体で踏査すると心強い、積極的意思表示がなされた。その上で、隣接支部との調整などの具体案が次々に提示され、すでに一部踏査を開始している支部もあって、机上から地上へと確実に進捗していることを実感させられた。

その他、報告書の書式などについても審議が続けられ、正午前に終了。昼食後、午後からは宮崎紘一委員が講師となつてGPS(すでに各支部へ1台ずつ配布された「latex-legend」日本語版)の使い方、納入会社の安保氏による挿入地図ソフトの紹介など、実機を使つての講習会が行われた。最後には四番町周辺の街角で「あれ! 3時しか離れてないのに○○秒異なるぞ」など、GPS画面を見せ合いながらの検討が進められた。

3月22日(月)18時半から本部104号室で、首都圏の分水嶺担当者会議が開催された。今回の計画の中で、福島・栃木県境の甲子峠から尾瀬の鳩待峠までと、新潟・群馬・長野県境の三国峠から群馬・山梨・長野県境の三国峠まで

の2区間については、首都圏の担当として同好会(同期会を含む)に呼びかけたところ、15の会から参加申し込みがあった。当日は、これら同好会の担当者が一同に会して、前述の地方支部の会議と同じ内容について打ち合わせた。最初に、あらかじめ実施した希望調査をもとに調整した各同好会の担当区間を確認した。

なお、空白となつた1区間については、この計画の提案元である科学委員会が担当することになった。首都圏の担当する区間も登山道が整備されていないところが多く、各同好会とも積雪期、新緑または紅葉の時期など、それぞれの区間で最適と思われる時期を選んで山行を計画している旨の報告があった。

これらの会議を通して、いよいよ4月から各支部とも本格的に創立100周年記念の国内登山に取り組むことが確認された。

なお、右記のGPS(4万8700円)と挿入地図ソフト(1万4000円)を購入希望の方は事務局まで、FAX、手紙またはEメールでお申し込みください。

ポカラ国際山岳博物館開館式に出席して

松田 雄一

会報『山』705号16ページの速報の通り、2月5日タパ首相を主賓に迎え、盛会裡にポカラ山岳博物館(IMM)開館式(Grand Opening)が開催された。開館前日の4日には予定通り、ラマの高僧Tenboche RimbocheによるIMM建物のプジャ(祈禱)も済み、式典のリハーサルも行われ、屋外展示物のマナスル・モデルも、みごとにでき上り、準備万端整ったためか、IMMのスタッフにも、余裕が見受けられた。

日本からの参加者は100人を超え、本会会員も、会長代理として出席の芳賀副会長や黒川理事はじめ、北海道から九州まで全国各地から、約40名が出席、この博物館と日本の登山界とのかかわりの深さがあらわれていた。



壇上のタパ首相(中央)とゲストたち

第1部 開館式の式典

開館式当日のポカラは好天に恵まれ、近隣住民が華やいた気分、セレモニーの開始を待つ。式典は、定刻11時に遅れながらも、カトマンズからヘリで駆けつけたタパ首相の到着を待ちプログラム通り進行していった。

ネパールの国家斉唱について、アーティスト・グループによる新曲「Welcome to International Mountain Museum」と、セント・メアリー・スクールの制服姿の生徒たちによる歓迎の歌と踊りが披露された。

式典は、主催者を代表して、IMMの運営委員長のD. グルン氏の開会の挨拶で始まり、次いで事務局長のブミ・ラマ氏により、元NMI会長の故ダワ・ノルブ氏の遺志について、1995年12月に具体的な建設計画がはじまってから9年の歳月を費やし、今日の日を迎えるまでの経過報告が行われた。総工費は79,603,927ルピー(邦貨換算約2億8千万円)。このうち、外国からの資金援助は総工費の24%に当たる19,096,070ルピーで、このうち82%が日本、他のアジア各国(韓国、中国、インド、台湾)で13%、イタリア5%であり、日本の協力がいかに大きかったかがわかる。

来賓の挨拶としては、まず日本の登山界を代表して山岳博物館協議会代表の坂口三郎氏が祝辞を述べた後、今回も2,465,124円(約23,000ドル)の支援金がNMA

宛に贈呈された。ついで地元を代表して、カマル・マン・グルン氏、支援国を代表して 神長善治駐ネパール日本大使、ネパール政府からは、主管のシュクラ観光相らが、それぞれ挨拶にたち、最後にタパ首相から感謝状の贈呈と挨拶があり、NMAアンツェリン会長の謝辞をもって第1部の式典は無事終了した。

テーブル・カットの後、館内の視察が行われた。メイン・ゲートの階段を登って館内にはいると、そこは2階のバルコニーで、正面には、大森弘一郎氏撮影によるエヴェレストのイエロー・バンドの大型航空写真が飾られており、その迫力に圧倒される。2階通路に面して左側には、ラマ僧院をイメージして作られた仏間がある。この隣に会議室。ライブラリー、さらに貴重なヒマラヤの初登頂の映像記録を備えたオーディオ・ルームがある。

1階には広いスペースの展示室がある。そのコンセプトは登山だけでなく、ヒマラヤの歴史、そこに住む人々の文化や、動植物の多様性など広範囲に及ぶ。なかでも、河口慧海、Dr.ハーゲン、メスナー、田部井淳子らの個人別のコーナーが注目されており、ほかにICIMOD、IUCNなどの国際機関やWWFなどのパネルが展示され、ヒマラヤにおける環境保全の大切さを呼びかけている。

ゲストたちはヘワ・プリンス・ホテルの庭園での昼食会で休憩の後、午後は再びIMMへ戻って、屋外ステージでの周辺の山岳民族の歌と踊りの祭典を楽しんだ。

第2部 夜の祝宴(ガラ・ディナー)

開館式第2部の夜の祝宴は、NMA主催により、会場をポカラ随一の大型ホテル、フルバリ・リゾートに移して行われた。席上、JICA派遣の安藤久男氏ら、功労者の表彰があり、各国から出席された団体の代表者には、それぞれ感謝状が贈られた。日本山岳会からは、芳賀副会長が祝意を述べた後、IMM開館の記念として、NMAに対して「マナスルの額装した写真」を贈呈したいとの挨拶があり、あわせて撮影者の大森弘一郎氏と協力したセイコー・エプソン社の代表池田睦雄氏の紹介があった。参加した多くのシェルパたちも、日本をはじめ各国から参加した人たちとも、あちこちで交流が行われ、ポカラの最後の夜にふさわしい、楽しい集まりであった。

当初からの協力の度合いが濃かったためか、展示内容も式典参加者も多く、日本側から見れば満足すべきものであったかもしれない。しかし「国際山岳博物館」としての成果は、今後の運営にかかっている。開館後は入館料も外国人観光客は300ルピーに決まり、NMAとしての本格的営業がはじまる。会員各位におかれても、ぜひIMMを訪問し、支援されますよう切望してやみません。[追記]「ポカラ山博支援募金」報告終了後、西郡光昭会員より1万円の入金がありましたので、御礼方々報告します。

■プロローグ

すべては1996年に出版した『ヒマラヤの東』（山と溪谷社）から始まります。さらに淵源を辿ると1961年の一橋大学ベルー・ボリア・アンデス遠征隊にまで遡ります。外国の山に行きたい一心で大先輩の故・吉沢一郎さんを担ぎだしました。情報収集のため吉沢さんが、当時気鋭の登山家ニコラス・クリンチさんにアプローチし、晩年まで親交が続きました。私との接点は1993年のクリンチさんの梅里雪山巡礼路1周以来です。

2月25日、クリンチさんがサンフランシスコ空港で私を出迎えてくれました。

ブラリーを案内してもらい感嘆しました。折りしもアメリカ山岳会（AACC）終身名誉会長ロバート・ペイツ（93歳）さん夫妻がボストンからきており夕食をともにする機会をえました。アメリカの登山界で最も尊敬されているおふたり、K2の草分けである第一世代のペイツさんと第二世代のクリンチさんに会えたことは幸運な旅の始まりでした。クリンチさんの登山歴は輝かしいものです。カラコルムのヒドン・ピーク、マッシャーブルム、南極の最高峰ビンソン・マッシフ、中国崑崙山脈の最高峰の初登頂をはじめ常にパイオニア的な登山を実践してきました。英国アルパインクラブの名誉会員でもあり、昨年は女王陛下ご臨席のエヴェレスト登頂50周年式典に奥様のベステイさんと一緒に出席しています。

今回私が年次総会での講演を依頼されたのは、AACのアメリカン・アルパイン・ジャーナル(AAJ)2003年号で『ヒマラヤの東』が大きく取り上げられ(朝日新聞で紹介)、ここ数年にわたり英国のアルパイン・ジャーナルとインドのヒマラヤン・ジャーナルに定期的に寄稿し、加えてJ AACの海外向け英文誌ジャパニーズ・アル

■講演とその反響

2月26日、私を招聘するために根回しをしてくれたAACの理事ファーマンさんがラスベガスの空港で出迎えてくれました。総会の会場・宿泊場所はリビエラ・ホテルです。夜はマーク・リッチー会長、ジム・フラッシュ副会長、シマンスキー部長ほか幹部の方々が夕食に呼んでくれました。このさりげないアレンジもファーマンさんの気配りです。彼は新進気鋭の経営コンサルタントです。コロラド・スプリングを拠点に全米を飛びまわっています。現在44歳、仕事と山を両立しアメリカン・ドリームを実現しつつある有能な人物です。総会は2月27、28日の2日間です。

総会には200人強のAAC役員メンバーがアメリカ各地と英国から参加し、たいへん盛況でした。外交辞令でも私の講演は「ハイライトだった」と言われると年甲斐もなく嬉しくなりました。講演は「心眼でエヴェレストに登る」を皮切りにパキスタンの山、グリーンランド、南極、パタゴニアと「ヒマラヤの東」です。私の講演には一番いい時間帯を割り当ててくれました。晚餐会のホールに隣接する広い場所で開催、登山グッズの販売、新刊・古書の販売が行われています。晩

私のスピーチに先立ちファーマンさんが私を紹介する際に秩父宮記念山岳賞にも触れてくれました。地図5枚と未踏峰に重点をおいた80枚のスライドで「ヒマラヤの東」を紹介しました。

キーワードは「世界のグレート・レインジ(Greater Range)に残された探検的登山の最後のフロンティア」です。話の中にできるだけアメリカ人英国人の動向をトピックとして織り込みました。そして、残念なことに日本の登山家たちは未知の領域への関心が薄れてきていることも話しました。

晩餐会の前のカクテル・パーティーではたくさんの方々から質問を受けました。晩餐会の私の席は副会長ジム・フラッシュ（前会長）がパトロンのテーブルでした。同じテーブルにJACCと親密な元カナダ山岳会会長マイク・モティマー、AAJ編集長ジョン・ハーリン、指導夫を連れたエウレスト・登頂者ウエイヘンマイヤー、この日JACCライブラリー賞を授与された著名な冒険家マーク・ジェンキンスの諸氏とフアーマンさんが座りました。晩餐会の会長挨拶のときリッチーさんはスピーチの途上あらためて私の講演の意義を話し、私を立たせて皆様に紹介してくれました。AACの配慮は細かく行きとどいていました。アメリカン・ホスピタリティーを感じました。

晩餐会でもベイツさんとクリンチさ

んの存在感は際立っていました。AACの誰もが尊敬し止まないおふたりのようです。たいへんよい雰囲気でした。

■人との出会い「世間は狭い」

多くの人たちと出会い、たくさんの方の感動をもらいました。多くのボランティアに支えられた盲目の登山家のエヴェレストには心を打たれました。グリーンランドの講演では前段で紹介した、両足のないクライマーにヨセミテの大岩壁を登攀させるためのグループのサポートも印象的でした。パタゴニアの岩峰登攀は美しい映像でした。

「世間は狭い」と言えばリッチーAAC会長とです。今年の1月末にAACが招聘したインド海軍中佐の登山家サティアブラタ・ダムさんの友人で、東カラコラム合同登山隊とともに参加した間柄です。また、奥さんはペルー人で、ペルー登山界の第一人者セサル・モラーレスさんの姪です。1961年に一橋大がペルーのコレディエラ・ブランカに日本隊として初めて入ったときお世話になったのがモラーレスさんで、もう80歳をこえたが健在であることを知り、話が弾みました。

今までEメールで交信のあった東チベット、雲南、四川に関わる3人とも顔を合わすことができました。そのうち冒険家のマーク・ジェンキンスと元AAC会長のデッド・ペイルとは私が使っている四川省・成都のガイドと共通の接点があります。もう1人は四姑



マーク・リッチー AAC会長夫妻と

娘山主峰南壁にソロで新ルート開拓など横断山脈で実績を残しているチャリー・ファウラーです。彼も晩餐会で賞をもらいました。デッド・ペイルとは「シャングリラ」の場所を巡って議論しましたが平行線でした。

世界山岳連盟UIAAの現会長のイアン・マクノート・デービス夫妻にも昨年2月のインド・ボンベイでのヒマラヤン・クラブ創立75周年記念行事以来の再会でした。彼にはボンベイのヒマラヤン・ジャーナル編集長ハリシユ・カパディアさんの家で日本のアスリートの免疫不全について宿題をもらったが、まっとうな返事をしていなかったで借りがありました。イアンは1956年に初登頂した「ムスターク・タワー」の講演をしました。その中で、若き日にパリのエッフェル塔に登ったフィルムを上映したのには驚きました。彼は何度か来日し、UIAA会長として毎年の総会で日本山岳協会

の代表と会っていて、日本の登山界に詳しいはずですが、昨年ボンベイでこんな質問を受けたことがあります。

「ところでトム、日本山岳会と日本山岳協会はどことが違うのか」私は一瞬哑然としましたが、翻って考えてみれば知日派である彼でもその程度の関心なのか、日本は世界の登山界から孤立していると思ったことでした。他でも同じ質問をされることがありますが、英国のアルパイン・クラブとブリティッシュ・マウンテニアリング・アソシエーション(BMC)の関係と類似していると答えることにしています。ただし、ふたつの団体の間で、英国の場合は人事交流が緊密だが、日本の場合はほとんどないと付け加えます。

今回の総会を通じて、日本からの情報発信者としての名前を聞いたのは、「大阪山の会」の大西保さんだけでした。大西さんは西ネパール・ムスタン・ヒマールとその周辺についての貴重な情報を提供し続けています。副会長のジム・フラッシュュとその仲間たちが感謝しておりました。大西さんにはジャパニーズ・アルパイン・ニューズ・ムスタン・ヒマール特集号を出してもらっています。

この原稿を書いているとき、英国の山岳ジャーナリストの第一人者であるリンゼイ・グリフィンからEメールが入り、私のAAC総会での講演のことをAAJ編集長ジョン・ハーリンから報告を受けたと伝えてきました。終わ

った翌日、冒頭の英文Eメールの発信者リンダ・マクミラン夫妻に午前中レッド・ロックへ連れて行ってもらいました。彼女はヨセミテ国立公園環境保護委員会の委員長も勤める、神崎忠男さんの友人です。午後はUIAAのマウンテニアリング・コミッティーのレイザ・モランさんにラスベガスを案内してもらいました。彼女はユナイテッド・エアラインで働いています。

■アメリカ山岳会の現状

アメリカ山岳会による今回の招待はラスベガスまでですが、3月1日にAACの役員の立場でコロラド州デンバー郊外のゴールデンにあるAACの本部を訪問しました。102年の歴史をもつAACの本部がニューヨークからコロラドに移ったのは11年前の1993年です。3階建ての建物の立派さ、オフィスのゴージャスさ、AACが誇りとするライブラリーの充実ぶり、そして12〜13畳の高さの屋内人工壁に驚かされました。この建物の名前はコロラド・マウンテニアリング・センター、オーナーはAACで一部をコロラド山岳会と青少年野外センターにリースしています。素晴らしい山岳図書館はオフィスとは別になっています。歴史・伝統・文化が融合した雰囲気を感じています。オフィスはゆつたりしています。広い受付、IT機器が完備した専属スタッフの個室、会議室などなど、手狭なJACルームと比べると羨

	1993	1996	1999	2002
会員数	1,700	3,342	5,828	6,332
年間予算(千円 \$1=110円)	37,000	60,000	103,000	137,000
有給専属スタッフ	4	6	8	10
コンピュータ・ステーション	4	6	8	12
コンピュータ・ネットワーク	0	0	1	3
会長がクラブのために使う時間	週0.5日	週1日	週2日	週2日

望のかぎりです。
本格的な図書館の機能・スペースをもつライブラリーには強い印象を受けました。3人の専属ライブラリアンが働いています。ジャーナル類は国別に整理されており、日本の『山岳』『山と溪谷』『岩と雪』など完全なカタログに並んでいます。古今東西の書籍があることは言うまでもありません。これから何年かけて各国の本を英訳する予定もあります。クリンチさんを通じて寄贈した故・吉沢一郎さんの和書1800冊もいずれ所を得ると思います。ヒマラヤ8千峰14座に関する全ての文献を集めたジョン・ポイルさんのコレクションは1997年にAACに寄贈され、そのためにひとつの部屋が使われています。入口のドアに協力者の銘版が張られ、そのなかにアダムス・カーターやエリザベス・ホーリーとともに薬師義美さんの名前もあります。現在のAAC会員数は2003

年末で7300人、03年に8%増加、04年も8%増を見込んでいます。本部がニューヨークからコロラドに移ったあとの推移を見てみましょう。
アメリカの登山家は東部よりも中央部、西部のワイオミング、コロラド、カリフォルニア、ワシントン、オレゴンの各州に多く住んでいます。AACは本部をコロラドに移したあとと英国のアルパイン・クラブ的な組織・運営から転換し大衆化路線をとりました。入会の推薦制を止め、誰でも入れるようオープンにしました。前記の表の数字が物語っています。年会費は1人75ドル、財政的にはバランスを保っているとのことです。総収入に占める会費の割合は60%ぐらいで、その他は投資(4億円)のリターン、登山用具店その他からの寄付、出版物の販売、AACグッズの販売、広告などです。
現会長のリッチーさんは43歳、昨今まで会長を務め今は副会長のシム・フラッシュさんは48歳です。ファーマンさんは44歳です。会長の年齢については議論があったようですが、40歳代がマネージメントを仕切っているのはアメリカらしいと言えます。会長の選出は、第1段階で指名委員会(Nominating Committee)が指名し、第2段階で理事会(Board of Directors)が承認するやり方で、紛糾したこともあったようです。会員の平均年齢は40歳です。JACの61歳と比べると若いのです。ただ若手の会員はベネフィットを

求めたがる性向が強いようです。

大衆化路線をとったことによる問題はできているようですが、戦略計画を担当しているファーマンさんは、AACの伝統・カルチャーを老・中・青の世代間でいかに継承していくかが大事な課題で、そのために具体的に何をすべきかを問われていると強調していました。もうひとつの課題は競技登山への対応です。AACの伝統はアルパイン・クライミングであり、その軸足を変えることはないが、競技登山がオリンピック種目に入ったとき、AACとしては横目で見ていただけでいいのかという意見もあるとのことでした。
AACの組織・運営・戦略計画に関する50ページにわたる詳しいレポートをもらってききました。機会があれば紹介したいと思います。ここ数年のAACの重点プロジェクトは山岳博物館(Mountain Museum)の立ち上げです。今の建物の中にスペースを確保してあります。予算3〜4億円です。資金調達のためナショナル・ジオグラフィックの支援も視野に入れています。

■エピソード―夢を語る

コロラドではブレッケンリッジのスキー場にあるファーマンさんのキャビン(標高3400m)に案内され泊まりました。松材をふんだんに使った全館空調のデラックスな山荘です。ひと晩ゆっくり話をしました。そのなかで東チベットへの日米合同隊を検討したいかどうかとの打診をうけました。もちろんまだ彼の個人的なアイデアの段階ですが、はじめに考える価値は十分であると話しました。JACは来年100周年を迎えるので、AACとJACとの合同が望ましいが、推進母体についてはフレキシブルに考えることも必要だろうとコメントしておきました。
合同隊の遠征対象は①キングドン・ウオードの足跡を辿る、②価値ある未踏峰を登る、③②を組み合わせて魅力のある企画をつくり、ナショナル・ジオグラフィックを参画させる、そんなシナリオを2人で描きました。登攀隊を出す以上成功させねばならないので、少数精鋭の日米チーム編成が必須である、アメリカを代表するクライマー、カルロス・ビュラーあたりはどうかと聞いたら、興味は持たずだろうとのことでした。私は裏方として、秋にはラサで許可の可能性を打診しようかと考えています。
もうひとつの夢は冒険家マーク・ジエンキンスからの誘いです。彼は私と同じように東南チベットと北部ミャンマーに執心しており、国境を越える踏査行と一緒にやらないかと熱く持ちかけられました。地政学的にみて中国・ミャンマー両国から同時に許可をとることは不可能です。実現したらこれほどエキサイティングな旅はないでしょう。しかし、私は今年中に古希を迎えます。どうやら私に残された時間は少なすぎます。

100周年ニュース

100周年記念事業「日本人の足跡を訪ねて」 海外トレッキング企画の概要 (下)

記念登山隊実行委員会 トレッキング担当委員 黒川 恵

本企画は、日本人が辿った山岳地や辺境地を、専門旅行業者との提携によってツアー化し、会員サービスの一環として位置づけながら広く参加者を募集するものです。

- 各企画出発日のおよそ1年前に、募集要項を発表します。
- 各企画出発日のおよそ1か月前に、参加要項を発表します。

「日本人の足跡を訪ねて」シリーズ (企画概要)

7. アイガー東山稜登山と日本山岳会の足跡を辿る

□時期：2005年7月中旬

□期間：約10日間

□日本人の足跡：1910年以降、本会の先駆者たちが、特にスイスベルナー・アルプスに残した足跡を辿る。ベルナー3山、フィンスターアールホルン、ヴェッターホルン等々。

□ポイント：アイガー東山稜のみではなく、ユングフラウ、メンヒ、ヴェッターホルン、フィンスターアールホルン等への分散登山と、アレッチ氷河のコンコルディアを訪ねる。体力、技術、お仲間等に応じ、自由闊達にアルプス登山を楽しみ先人を偲ぶ。

8. アルプス3つの北壁と日本山岳会の足跡を訪ねる

□時期：2005年7月中旬

□期間：約10日間

□日本人の足跡：1900年代からアルプス各地で行われた、日本山岳会の先駆者たちのアイガー、マッターホルン、モンブラン等のヴァリエーションや1960年代からの日本人によるアルプス3つの北壁登攀の足跡を訪ねる。

□ポイント：ヨーロッパアルプス3大北壁と称されるアイガー、マッターホルン、グランド・ジョラスの各北壁を中心に眺めながら、山小屋に宿泊し、日本人ゆかりの地を巡りアルピニズムの真髄に迫る。

9. 雲南、東チベット、四川・未踏峰の聳える国を探訪する

□時期：2005年10月中旬

□期間：約30日間 (前半部、後半部でそれぞれ19日間あり)

□日本人の足跡：戦前の探検時代を除いても、1979年以降、日本山岳会および関係者が中国西南部に残した足跡は大きい。大ヒマラヤ、トランス・ヒマラヤ、横断山脈等々最近まで日本人や外国人が残した足跡を再訪し、パイオニアワークの薫りを追

体験。

□ポイント：雲南省シャングリラの未踏峰、梅里雪山から日本山岳会隊が初登頂したヤルツァンポー大屈曲点に聳えるナムチャバルワ峰へ。さらに唐古拉(タングラ)山群と四川省の未踏峰地帯を通り、横断山脈の主峰ミニヤコンガ峰まで縦横に訪ね歩く。

<7~9の担当：(株)アトラストレック>

10. チョー・オユーBCとナンパ・ラ (峠) 越え

□時期：2005年9~10月

□旅行期間：19日間

□日本人の足跡：1987年、カモシカ同人隊による中国側からのチョー・オユー登頂。

□ポイント：シェルパ族の移住ルートで交易ルートであるナンパ・ラ (峠・5716m) を、チベット側からネパール側へ1週間のトレッキングで踏破する。

11. シルクロードと天山へリ・ハイキング

□時期：2005年7月

□期間：13日間

□日本人の足跡：1925年、第1次大谷探検隊。その他。

□ポイント：天山とパミールを擁する中央アジアの天山北路をたどり中国からカザフスタンへ。花咲く高原の登山基地から、ヘリコプターで名峰ハンテングリ直下の氷河上のBCへ飛ぶ。

12. サヤン山脈最高峰登頂とバイカル湖

□時期：2005年6月~7月

□期間：11日間

□日本人の足跡：江戸時代の回船船頭、大黒屋光太夫はアリュシャン列島に難破漂流後、カムチャッカ、イルクーツクへ辿り着き、また明治から昭和にかけては考古民俗学者の鳥井龍蔵博士がアムール川をイルクーツクまで調査した。

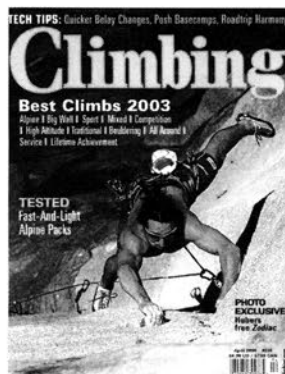
□ポイント：シベリアの真珠とうたわれるバイカル湖、そのバイカル湖に注ぐイルクーツ川はサヤン山脈を水源とする。サヤン山脈の最高峰ムンク・サルディエン峰3491mへの登山。

<10~12の担当：(株)ウェック・トレック>

海外の山

2003年最高の登攀

江本 嘉伸

フーバー兄弟の登攀
「Climbing」誌4月号

米「Climbing」誌の4月号は、「2003年のベストクライミング」を特集している。世界のクライミング情報の中から「未来を切り開く登攀」に対して「黄金のピトン」を与えるものだ。

フランスの「Montagne (モンターニュ)」誌の「黄金のピッケル(ピオレ・ドール)」賞が秀れたアルパイン・クライミングのみを対象にしているのに対し、こちらは細かく11部門に分けて選考しているのが特徴だ。たとえば「アルパイン・クライミング」部門の「黄金のピトン」は、冬、モンブランのフレイネ稜と南面のブルーヤード壁の16のルートと22日かけて登ったフランスのパトリック・ベルオート、フィリップ・マダグナンが榮譽に浴した。2人は2月11日、壁の基部にあるエクレス小屋に集結し、連日のおもなクローワール・ルートを登攀、いったんシャモニにスキーで下って、2日間

の短い休息と食料補給のあと、こんどはおもなバットレス・ルートの連続登攀をやつてのけたのである。

「ビッグ・ウォール」部門では、エルキヤピタンで最も急峻なゾディアック・ルートをフリーで登りきった、アレックスとトーマスのフーバー兄弟が選ばれた。兄弟の登攀は、「Climbing」誌の表紙、グラビア特集で詳しく紹介されている。

女性クライマーの活躍も光る。

「ミックス壁でのスポーツ・クライミング」部門ではドイツの29歳の女性クライマー、イネス・パペルが、「競技クライミング」部門では12月エジンバラで開かれたワールドカップでボルダリングとルート競技の双方で勝ったサンドリース・ルベが見事「黄金のピトン」を受賞した。

「高所登山」部門のことを少し詳しく紹介しよう。2003年に3つの貴重な登攀がいずれもネパールの7

千峰で行われた。

この17年間多くの挑戦をしりぞけてきたヌプツェ東峰(7804m)南東バットレスは、ついにワレリー・ババノフとユリー・コシヤレンコのロシア人パーティーに登られた。「Montagne」誌主催の選考委員会が、「黄金のピッケル」に選んだのは、このふたりである。しかし、「Climbing」誌は「最高」の評価は与えなかった。はじめの1200mに固定ロープが張られた分、評価は下がる、というのである。

イアン・パーネル、ケントン・クール、ジョン・ヴァルコの英米チームは、アンナブルナIII峰南東稜の初登攀をなしとげた。「5・10X」の難しいピッチを含む2500mのルートを9日がかりでの登攀だったが、下部に2000年のスロベニア隊が残置した大量のフィックス・ロープがあり、頼る瞬間もあったらしい。

これに対し、ヌプツェ(7861m)北バットレスの「クリスタル・スネーク」を登りきったダミアン・ウィリーの双子のベネガス兄弟は、これまで誰もしたことの無いラインを完成させたものだった。氷雪の壁で6日間、42ピッチに及んだ登攀中、ふたりはほとんど一睡もできず、多量の登攀具も携行しなかった

ため「登りきるしかない」状態だった。兄弟の快挙を、同誌は高所登山部門での最高のクライミングと評価し、「黄金のピトン」受賞者とした。そして、「万能(オールアラウンド)」部門がある。ことしは、岩のスペシャリスト、日本の平山ユージが選ばれた。サラテを13時間で1度も落ちずにフリーで登りきったことなど、彼がビッグウォールで「5・13」のピッチをオンサイト(初見)で登り続けるという、アメリカのフリークライマー長年の夢を実現したことが、高く評価された。

「最高の登攀」を選ぶ苦労について「Climbing」誌は「時にはすばらしい登攀が自分たちの耳に入ってこないこともある」と率直に話している。しかし、「最後には「最高」を見つけて出す」とも。

ひるがえって、日本ではどうだろうか。登山の評価を真剣にやっているだろうか。

さて、ヒマラヤ登山の季節。この春は日本初の「商業公募登山隊」としてエヴェレストをねらう「アドベンチャーガイズ隊」が話題だが、注目されるのは、ことしも日本山岳会会員でもある竹内洋岳(ひろふか)の挑戦(HA M=High Altitude Marathon 計画)だろう。詳しくは次の号で。

報告

4月

Report

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です

図書委員会

水野勉氏講演会

2月13日(金)、第36回「山岳図書を語る夕」は水野勉氏をお招きし、「本から山へ——ぼくの昭和史」と題して語っていただいた。参加者は35名。

はじめに図書委員会理事の田村俊介氏から講師を紹介するため、私家版『水野勉・主要著作目録』をお借りした。これがすごい。まさに燦然たるミズノワールド。それが形成されるまでの道程を、少年時代から今にいたる読書遍歴を通して語ったのが本講演である。

1930(昭和5)年生まれの水野氏は14歳で陸軍幼年学校に入る。その間に読んだ本は宣長、白石、徂来、松陰等。尾崎喜八『此の糧』に発奮、心を戦争へと駆り

立てられた。敗戦で権威と価値を喪失した神国日本の軍国少年は、尾崎のその後の去就を嫌う。戦争は水野氏のなかに尾を引いて、今

も思考と行動の端々に現れる。戦後空腹をかかえ、手に入る本は和洋とりまぜて片っ端から読んだが、かつての若者の教養書や田辺、西田の哲学は拒否。杉本栄一『近代経済学の解明』で経済学の面白さを知り、大塚久雄『近代欧州経済史序説』の論理展開に圧倒された。戦時中に書かれた武田泰

淳『司馬遷』や竹内好『魯迅』に魅かれる。52年の宮城前広場メーデー事件で敗戦に次ぐ衝撃的な挫折を体験。迷いながら丸山真男『日本政治思想史研究』等を読む。20歳代半ばで勤務先の山岳部創立に参加、思索の手がかりをJAC『山岳』に求め、日本アルピニ

ズム創成期の登山家を知る。特に今西錦司から影響を受け、『山岳省察』の方法に救いを見た。『生物の世界』からも多くを学んだが、今西の体系的思考には魅かれながらも抵抗がある。

その頃から山の文章を旺盛に書き始めた。ヒマラヤ・ブームに乗って西洋、中国のヒマラヤ文献を集めだし、書きまくり訳しまくり、外国語の習得に精を出す。それらの記事を通して川崎隆章、望月達夫、諏訪多栄蔵等と知り合った。62年、山書の会の創立に加わる。

本の蒐集が面白く、小林義正、深田久弥等に強い影響を受けたが、水野氏の場合はあくまでも研究資料としての文献蒐集。その点で文献に対する評価のない小林の『山と書物』には不満がある。

水野氏は山の文章を読んで自分の思いをぶつける。人を論じるのは自分の座標や位置を他人との関わりで把握するため。だからヒマラヤ、アルプス、中央アジア、北方アジア『文献追遙』等の書誌研究も、『登山家素描』『アルピニストたちの神話』等の人物論も、ダブス、クルツ、シプトン、デュビュイ、ヘディン、カシン、タイク

マン、レイフィールド、ウェストン等の翻訳も、すべて自画像だと思っている。それは水野氏の人生論であり、幸福論である。

幼児期にカソリックの祖父から嫌々たたき込まれた聖書の「はじめにコトバ在りき」が染みついて、水野氏はコトバが好きである。その性分からして、思想や世界観や人生に対する態度を離れて山をとらえることはできない。

最後に水野氏は、ぼくは戦争のせいで技術に嫌悪感を抱き、あらゆる権威に拒否反応がある、そのため何ごとでも中途半端でいい加減、困ったもんだが仕方ないと、お得意の韜晦で会場を煙に巻いた。ミズノワールドの秘密はしっかりと見せていただいた。(平井 吉夫)

学生部

アイスクライミング講習会八ヶ岳で開催

2月10日、無風快晴の冬空の下、八ヶ岳柳川南沢大滝において学生部主催のアイスクライミング講習会が行われた。参加者は学生、コイチ、監督を含めて23名。講師はJAC青年部委員でプロガイドで



初心者もトップロープで練習

もある松原氏と、同じくプロガイドの岡田氏にお願いした。

参加者のほとんどがアイスクライミングの経験がない者であったため、特に基礎的な登攀技術、道具の選び方、安全への配慮等を中心に講習を進めていただいた。

朝方へつぱり腰だった学生も、夕方には軽やかな動きで登るまでになった。しかし、何分大人数のため、1人1日で3本程度しか登ることができず、またトップロープでの練習であったため、リードの経験をさせることができなかった。込み合った状況のため、落氷による怪我也有り、今後実施するにあたっては改善の余地が残された。

しかし、多くの学生がアイスクライミングにより一層の興味を抱いたことは幸いである。新たな技術を武器に、大いなる目標に邁進していつてくれることを切に願う。

(委員長・和田岳史)

事業委員会

志賀高原スキー懇親会に参加して

2月6日から2泊3日、事業委員会のスキー懇親会に参加した。総勢24名のうち女性性は13名で食事時やバスの中で初めての方でも親しく話すことができ、まさしく懇親会にふさわしいものだった。

1日目、2日目は時々雪が降ったが、最後の日は快晴で周囲の山並みの景観を十分に楽しむ事ができた。志賀の雪質はスキーに最適で、キュッキュツという雪のしめる音を聞きながらターンをしていると雪山の揺りかごにしているように大変気持ちの良いものだ。

志賀高原に入るのに、とても便利になり、スキー場が広々とした感じがしたのは、スキー人口が減っているからだろうか。リフトの効率が良くなり、待つこともなく滑りまわることができた。スキーの動く歩道があったのはびっくりした。

2日目に講習会を受けた。先生

は高橋さん、生徒は男女半々の6人。先生は教え方を研究してきた様子で意欲たっぷり。期待以上の講習だった。持病の膝の痛みがあったにもかかわらずリフト終了時までさまざまなスキー斜面で教えていただいたが、急斜面に行くときはメチャクチャな滑りになってしまふ不肖の生徒で大変申し訳なく思っている。先生が見本の滑りでずーっと下まで行ってしまうと残された生徒同士でああでもないこうでもないで復習し合っていた。講習会があることはひとりですべて参加している私にとっては、いろ

いろと安心感を与えてくれた。宿の食事はたっぷりおいしく、宿の人たちとても感じが良かったが、ただ、慣れるまでは乾燥室に行くのが迷路のようだった。

3日間、誰も怪我をせずにつこりと記念写真に納まる事ができて心より良かったと思う。

澄んだ空気の中で何度も深呼吸をして山の靈氣に感謝して、また長生きできると感じながら帰途についた。高橋先生をはじめお世話をして下さった山崎さん、ありがとうございました。

(腰原 真知子)

▲世界的に類を見ない貴重な探検記録 禁断のアフガーニスタン・パミール紀行

——ワハーン回廊の山・湖・人——

平位 剛 著

A5判 480頁 定価3,800円

地政的理由から永らく外国人の入域が閉ざされていたアフガーニスタン東北部に自腸のように突出するワハーン回廊へ故マースド将軍に庇護され、1999～2001年の3年間探検に入った世界的に類を見ない貴重な探検記録。



◎好評発売中!!

定価(本体33,000円+税)

カラコルム・ヒンズークシュ 登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉
宮森常雄 (秩父宮記念山岳賞受賞)・雁部貞夫 共著 ・カタログを請求下さい

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

水越武写真展と フォスコ・マライーニ氏 の近況

杉本 誠

昨年9月26日に北イタリア、トリノ市の国立トリノ山岳博物館で始まった水越武写真展「ヒマラヤ——白と黒」が4か月の会期を終え、1月25日に閉幕した。

私は水越氏とともに開会式に列席したが、今も鮮やかに思い出すのは、案内状、カタログ表紙、会場入口の看板すべてにカラコルムの鋭峰ホーク(6754m)の写真が使われていたことだ。「アルドさん、やりましたね」。館長室にあいさつに行く前から、アルド・アウデイズイオ館長への最

初の言葉を決めていた。

1993年5月に豊田市で開いた水越さんの写真展「自然へのまなざし」で、私もチラシの写真に同じホークを選び、報道関係にももつとも多く配布したからだ。

この時には、折りよく来日中のフォスコ・マライーニ氏(本会名誉会員)を招き記念講演をお願いした。これは同年9月に講談社から出た水越さんの写真集『ヒマラヤ』に氏が序文を寄せるという願ってもない話に発展している。

今回のトリノの写真展は、その延長線上にあるともいえ、カタログに再びマライーニ氏の序文が載って多くの賛辞が館に届いた。

開会式にはマライーニ氏が来場される予定だったが、体調不良とのことで、欠席された。翌日、私

は報告とお見舞いの両方でフィレンツェのお宅へ伺った。座談はいつも通りだったものの、邸内の散歩には杖を使われていた。日本とイタリアの双方で何度もお会いしている私にも、これは初めてのお姿だった。午睡の間をはさみ、日が落ちかかるまでの数時間は、私にとって得難いものであった。

水越展について、2月に入ってアウデイズイオ館長から来場者の声も含めて次の感想が届いた。「写真展を見たほとんどの人から特に作者が山に対してアプローチする姿勢についてですね。写真に表現されているのは、地理的なイメージを超えて、光と影、白と黒に凝縮された空間だと受け取られています」。

ここ数年、館でやってきた写真展のなかでは、もともと来場者の興味をひいたのは確かです。それは写真のクオリティの高さと表現のすばらしさへの感動ですね。私は、彼の作品が館のコレクションに収まることに大変満足しています」

なお同展は今秋、バンフのマウンテン・フェスティバルに合わせ

てフォワイティ美術館に巡回する予定になっている。

シュラギントワイトの パノラマ図受贈について

水野 勉

かつて『山』698号(2003年7月)に、山本健一郎さんが「シュラギントワイトの本」という文を寄稿されたことがある。そのなかで、山本さんはシュラギントワイト3兄弟の『インドおよび高地アジアの科学調査報告書』を当会100周年記念として、入手したらどうかと提案されている。会としても有意義なことであり、可能であれば入手したいと、ロンドンはじめヨーロッパの古書店に連絡して探していたが、何ら良い知らせがなかった。それほど、この本は希覯なのである。

そのうち、この本を所有していた会員の小谷隆一さんが、数多くの山岳図書とともに、この本を信州大学山岳科学総合研究所付属図書館に寄贈された。同研究所では当会が入手を希望していることを知って、『アトラス(図版集)』の

うち、主なパノラマ図7枚を複製して、当会に寄贈された。

3月1日に、同研究所運営委員長の高石道明教授が、わざわざ当ルームにパノラマ図を持参してくださったのである。当会では、平山会長はじめ関係者が出迎えて、みことな複製版に感嘆し、ありがたく受贈した。

ルームを訪れたことのある会員は、すでに見たことがあると思うが、シユラギントワイトの絵は「ネパールヒマラヤのガウリサンカール」と題されて、ルームに飾られている。この絵は松方三郎さんが寄贈したもので、かつて『山日記』(1969年版)の巻頭にも掲載されたことがある。

前述した「報告書」は本文4巻およびアトラス1巻で、本文は学術報告で、旅行記ではない。アトラスは、パノラマ図27、フィジカル・マップ3、地形図4、高地アジアの雪山のパノラマ的プロフィール7、気象図4となっている。

しかし、有名なのは、パノラマ図である。ほとんどがヘルマンの絵で、一部アドルフが描く。90×60センチで、すべてカラーのリトグラフ、すなわち石版画である。描

かれたのは1855年と1856年で、発行は1861年である。

今回受贈した複製版は、一部の7枚であるが、美麗に原寸で複製されていて、みことである。そのうち、額に入れてルームに飾り、訪れる会員がご覧になれるよう考えている。それにしても、信州大学山岳科学総合研究所のご厚意には深く感謝したい。

ウェストンと 槍ヶ岳・日本海

田畑 真一

明治時代末期のことだ。当時の会員・鶴殿正雄は、槍ヶ岳などから望む日本海に関心を示した。

「本会員では、まだ、槍と穂高とで、日本海を望見したものを聞かない、が、ウェストン氏は、槍で見える如く記された」(鶴殿「穂高岳槍ヶ岳縦走」『山岳』第5年 第1号)

前掲の『山岳』は明治41年3月の刊行だ。私は当時の『山岳』を明治39年4月に刊行された創刊号までさかのぼり、すべてを調べてみた。その結果、鶴殿が書いた通

り、関係する記事は見あたらなかった。その意味で、ウェストンの「槍で見える如く記され」との一文の意義は大きい。

鶴殿は出典をあげなかったが、これはウェストンの著書であることが明らかだ。

「西方には蒲田川の谷間を横切つて、笠岳が素晴らしい登攀を暗示し、その北の肩遥か彼方、富山平野の向こうには、煌く青海原が、『大洋の数多い輝く微笑』で、輝いている」(岡村精一訳『日本アルプス——登山と探検』)

記事には「日本海」との地名は

ない。が、文意からして、ウェストンは日本海を眺めた。こう断定できると思う。私はこの意味で、彼の記事こそ、槍ヶ岳から日本海を眺め、書き綴つた最初のものであった、と判断したい。

槍ヶ岳からは、確かに富山湾が眺められる。つまり、日本海が望まれる。この状況がわかりやすいパノラマ図によって表現された図書『百名山パノラマ案内』(白山書房・編)がある。また、綿密な展望図が描かれた図書『山岳展望ハンドブック2』(佐古清隆・著)もある。

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの 家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店 アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。

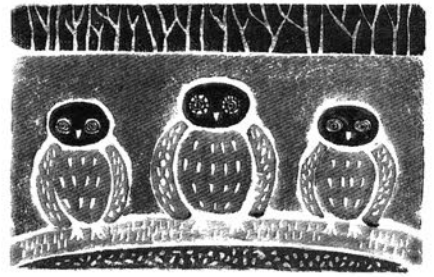
あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご用意します。

お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ**
ALPS WAY.
We Love Swiss
<http://www.fellow-travel.co.jp/>
〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスヴィップ渋谷ビル4F
Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300
e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp
〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F
Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986
e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催：株式会社 **フェロートラベル** ポンド保証会員
国土交通大臣登録旅行業664号 協賛：ウェンゲン観光局・フェルマツ観光局 後援：スイス政府観光局



図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野溪石

『世界遺産屋久島
多様性の回廊』

水越武・著

屋久島は厚く奥が深い。先年訪れてみて、島とは思えないその厚みとふところの深さに驚嘆した。世界にこんな島はない（いまのところ）と水越氏は言う。その厚みと多様性と奥の深さは、すでに『日本の原生林』『森林列島』『熱帯雨林』『カムイの森』などの重厚な写真集を発表している自然派の写真家としてはこころを吸い取られるような魅力だろう。どのページからも、息詰まるような迫力で屋久島が展開する。存在感がある、濃密な空間配置、などの言葉を作

者は解説で使っているが、写真はそれらを完全に表現している。屋久島の本は数多い。その中に巨人の歩みでさらに大きな一冊が加えられた。カバの飛沫をあげる瀑布の写真が内容の新鮮さと豪快さとを象徴している。京大教授山田勇、自然ガイド小原比呂志両氏の適切な随想・解説に加えて梅棹忠夫氏の戦後間もなくの紀行再録がある。

(大森 久雄)

2003年5月 講談社発行

159頁 3800円

『63歳のエヴェレスト』

渡邊玉枝・著

この50年間でエヴェレストを取り巻く環境は大きく変わった。コマールシャルエクスペディションが大半を占め、ほとんどの登山者が南東稜もしくは北稜から北東稜をたどる。サミッターはのべ1600人余にもなった。

しかしこれは、エヴェレストが簡単になったということでは決してない。装備が改良され、登る方法の選択肢が増え、登りやすくなり、大衆化したのは事実であつても、エヴェレストは依然として、

人間が存在するだけで衰弱し死へと向かう超高所である。

昨冬、ある会で渡邊玉枝氏の報告を聞き、彼女の体力とスピードに驚いた。これならば登れるはずだ、と心底思った。

本書を読んでわかったのは、その素地は山を始めたところからあるということだ。初めての登山は職域山岳会に入った直後、2月の谷川岳西黒尾根。それから国内の上級ルートや海外の高峰へも、あれよあれよという間に出かけていく。決して無理がなく気負いもない。

そして、運や天候にも左右される高所登山でも、毎回頂上を踏んでくるのは、真の実力によるものだ。

あくまでわかりやすい書名がついただけであり、彼女の登山のメインがエヴェレストなわけでもない。国内の山登りについても、生き生きと書き綴っている。高校生のころ、農作業を手伝っている笑顔の写真も印象的だ。そういったひとつひとつのことが、渡邊氏の登山を形作っていて、彼女の登山は日々のなかにあるのだと感じる。はるか大先輩の著作を生意気な言葉でしか紹介できなかったが、彼女の、しなやかな人生を生き、山

に登る姿に憧れている。(柏澄子)

2003年7月 白水社発行
213頁 1500円

2003静岡大学山岳部・編

『紫岳』第12号
創立70周年記念

旧静岡高等学校は昭和8年創立、25年学制改革により静岡大学となった。本書は、山岳部紫岳会の旧制17年、新制53年の記録である。前身の静岡高旅行部の創設1923年からは80周年となる。

何故「紫岳」という部報なのか。「旧制時代から続く部報名はほかにもあったが、山岳部活動を途切れることなく維持継続してきた旧制静岡高山岳部の伝統を引き継ぐのが正統な歴史の継承である。日本に大学山岳部多しといえども、南アに傾倒した吾が山岳部の軌跡を何んとしても統合した部報に残せないかと永年考え、戦後初の新生紫岳12号を編集、企画は最初69年に始まり海外遠征等で先送りとなつて実に34年ぶりの企画実現となった」と編集長は述べている。

編集は原稿、写真、地図等を委員でCD-ROM化して完全なP

Climbing & Medicine · 32

生活習慣病の予防と登山

佐藤 祐造

近年における家庭、職場におけるオートメーション化、コンピュータ化などいわゆる文明化された日常生活は過食（高脂肪食）と運動不足をもたらした、糖尿病を代表例とする生活習慣病を増加させている。

一方、登山は一部の愛好家が競技スポーツとして高山を目指すだけでなく、レジャー活動の普及とともに、生涯スポーツ、健康増進の目的で行われるようになり、熟年組によるヒマラヤトレッキングが急激に増加している時代となっている。

適度な食事制限と身体トレーニングの継続が糖尿病で低下しているインスリン感受性を改善させ、糖尿病（2型）の発症予防や病態改善に有用だけでなく、高血圧、高脂血症等インスリン抵抗性関連のすべての生活習慣病の予防、治療に役立つことは多くの疫学的、臨床的研究によって明らかとなっている。

最近、発表された米国の研究成績でも、食事、運動を中心とする生活習慣改善は、薬物療法より糖尿病の発症予防率が高いことが報告されている。

しかし、生活習慣改善の長期継続は極めて困難であり、インストラクターがマンツーマンで指導を行っても、実行率は約半数にとどまっていた。

私どもも正常血糖クランプ法を用いて、体力の指標（最大酸素摂取量）に影響を及ぼさないような軽、中等度の身体トレーニングでも、長期にわたって続ければ、体のインスリン感受性が糖・脂質代謝面で改善することを証明している。また、運動療法の実施が糖尿病患者の病態を改善させることもよく知られた事実であるが、長期実施は困難であり、中止後病態の悪化を招き、現在人工透析を実施中の症例も経験している。

したがって、それほど急峻でない里山を各人の体力、運動能力に応じてマイペースで登るような運動は、ストレス解消にも役立ち、実行しやすく、生活習慣病の予防、治療手段として今後なお一層推奨されるべきである。

しかし、登山では、高所で脱水に陥りやすく、水分補給は必ず実施する。また、散歩、ジョギングでは、心筋梗塞や外傷などの緊急事態になっても、救急活動は比較的容易であるのに対し、登山は行動中止後も下山が必要であるなど、事前に健康チェックはより念入りに行わなければならない。

登山が競技スポーツだけでなく、生涯スポーツとして、国民全般の健康増進、生活習慣病の予防対策に活用されることを望みたい。

（筆者は名古屋大学総合保健体育科学センター教授で、本稿は第23回登山医学シンポジウム特別講演で発表された内容の一部です）

新企画！☆K2初登頂50周年記念特別企画☆

究極の絶景が身近に。秘境デオサイ高原で高所順応

**K2・バルトロ氷河ヘリ・フライトと
コンコルディア、パイユ着陸11日間**

●5/20発・6/25発 476,000円
●7/16発 512,000円(残席わずか)
●8/27発・9/17発 498,000円

東京発着
国土交通大臣登録旅行業第490号／(株)日本旅行業協会正会員 ⑤ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

会刊行 447号

2003年7月 静岡大学山岳

(三沢 一三)

DFフォーマットのかたちで渡し、印刷、製本だけを業者に依頼、費用は3分の1以下となり、若いPC世代会員にCD-ROM部報を渡すことが可能となった。
本書はカラー写真8ページを含み第1部・歴史、2部・山行記録、国内、海外、3部・人、随想、紀行等、4部・部員、会員の足跡、その他の構成。部の過去、現在、未来にわたり抱える問題については、各大学共通の課題であろう。

会務報告

2月理事会

日時 2月12日18時30分～21時

場所 日本山岳会会議室

「出席者」平山会長、芳賀、平林、橋本各副会長、藤本、今村、小川、朴元、大蔵、賛田、田村、黒川、鈴木、野口、石田、山川（篠崎代）鳥居各理事、内田、一力各監事小倉（董）、重廣各常任評議員「委任」宮崎、鰐坂、西村各常任評議員

【審議事項】

1 「テンギ・ラウ・タウ（6943歳）シニア登山隊2004」派遣の件 朴元

保険および自己責任の一札を取っているだろうが審議するのが遅い。今後このようなパーティが増えることが予想されるのでルール作りをする必要がある。（承認）

2 高峰登山計画書、報告書作成の件 大蔵

別紙高峰登山計画書報告書の作成を山岳団体（日本山岳会、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会、日本ヒンズー

クシュ・カラコルム会議）で実施する。提出先は日山協、JACでは首都圏は青年部（大蔵理事）、各支部は各岳連に提出することとした。また「海外登山情報センター」を作ることとなった。（承認）

3 常務理事会運営の件 藤本
常務理事会は当面常務理事のみの出席で下記のように運営したい。①議題の整理（審議か報告かなど）をする。

②各種許可（写真掲載など）等事前に審議する。

③審議結果を理事会の前に会長、副会長に報告する。（承認）

4 平成16年度総務委員会、山研運営委員会予算の件 藤本・小川
①総務委員会予算の件

総会年次晩餐会など総務委員会担当の行事があるが、事業費で処理され、内容が不明確の部分があるので来年度から予算化したい。（承認）

②山研運営委員会予算の件

山研の管理人の人件費を本部経費とすると山研の収入がイーブンになる可能性が出てくる。意欲もわいてくるので別途予算化する。（承認）

【報告事項】

以下の件が担当者より報告され承認された。

1 会報『山』2月号の内容について 今村

2 ポカラ山岳博物館開所式について 黒川・芳賀

別紙のとおり黒川理事より報告があり、芳賀副会長より感想が述べられた。

3 インド海軍サティア・ブラダ・ダム氏訪日の件 藤本
無事全スケジュールを終え帰国した。

4 中央分水嶺シンポジウム開催について 石田
2月21日(土)13時～17時 グリーンホテルにて開催。今月は中央分水嶺担当者とともに支部事務局担当者も出席する。理事の方も出席してほしい。

5 支部事務局担当者会議開催について 藤本
2月22日(日)ルームにおいて開催。

6 中央分水嶺踏査担当者会議開催について 石田
2月22日(日)ルームにおいて開催。

7 平成15年度年次晩餐会実施費用報告 藤本
会員6000人に対する案内状

の費用約100万円が会の負担に

なっており、その他はすべて参加者の費用でまかなわれた。

8 環境庁提出の「大台ヶ原新利用」に関する見解について 代理・山川

環境庁作成のメニュー（案）に、自然保護委員会および関西支部は賛成し、高く評価する旨の意見書を環境庁近畿地区自然保護事務所に提出した。

9 医療委員会講演会 野口
2月29日(日)ルームにおいて開催する。ネパールトリブバン大学のブッタ先生に高山病の新しい考え方をお話しいただける。

10 山研利用状況報告 小川
本年度利用者総数は655名で前年度より241名減となった。年末年始の利用者は宿泊者49名、立ち寄り者19名。

11 YAMA-NET-JAPAN結成について 大蔵
2002年の国際山岳年の流れ

をくんで、ゆるやかな組織を続けたい。信州大学山岳総合研究所が事務局を担当する。

12 その他
①チベット登山協会、歓迎会開催の件 田村
2月23日(月)新宿中村屋で開催。

テンギ・ラウ・タウ (6943m) 未踏ルートからの第2登を目指す (シニア隊 カングリ・シャルからテンギ・ラウ・タウへ変更)

私たちJACシニア登山隊は今春ネパール・ロールワリン・ヒマールの峻峰、テンギ・ラウ・タウ (6943m) の未踏ルート (北稜) からの第2登を目指します。

会員の8割以上が50歳以上という当会の実情と、当委員会が年数回の国内登山の催事を実施しているなかで、冬の穂高や剣の壁はもう無理だが、若葉山行や紅葉山行では物足りないという中高年の会員の声を反映したもので、中高年だけで登れるヒマラヤの高峰、できれば未踏峰をということで計画、実行されたのが昨年のクーンブヒマールのカングリ・シャル (6811m) でした。

また 登山自体も予想していなかった大きなクレパスに阻まれ、梯子等の準備もなく余儀なく登頂は不成功に終わりました。

このようなわけで今回の計画は当初からカングリ・シャルの雪辱として募集が行われたわけですが、この山は地上最美の山と言われる“プロモリ”の隣の岩峰で高さも400mほど低く、未踏峰ではあるが登高の魅力にやや欠けること、昨年阻まれたクレパスからコルまでの氷雪壁は斜度50～60度の200～300mの急峻なもので今回のシニア隊での全員登頂は難しく、またBCまでのアプローチも長く、登山期間が限られた中では登攀期間もより短くなることなどが考えられます。

それにひきかえテンギ・ラウ・タウはこの山塊では頭抜けて高い主峰であり、登攀意欲を十分に湧かせる山で、資料、情報についても詳細なスケッチ (02年秋の根深氏<カングリ・シャル登

攀隊長>偵察時のもの) や藤井氏<今回の登攀隊長>の写真もあり、一昨年の計画を再度、見直した結果、初登頂ではないが北からのルートは未踏で、登攀には十分な価値があり、さらにアプローチも短く、全員登頂の可能性も高いということで今回の計画となりました。

世間の耳目を集めるような計画ではありませんが、自分たちの間口に合った計画を立案し、実行計画の詳細を作成し実施するもので、この遠征はシニア登山者が安全に充実した登山活動が行えるように登山期間、標高などの点で負担を比較的少なくし、未踏ルートであることから、実施に当たり、より安全に、確実に登頂して帰るべくタクティクスを組み、高所順応に十分な時間をかけ、極地法で標高差2400m (BC・4500m、頂上・6943m) に3つのキャンプを出し、無理せずに登ることを前提にチャレンジいたします。

幸い隊の編成も、昨年のメンバー2名も加わり、隊員全6名、サード、シェルパ全5名も大半が昨年と同じということで安全度と登頂の確度が高い高くなったと思われます。

リエゾンオフィサー、コック、キッチンボーイ含めて総勢14名の登山隊で、出発は4月7日、登頂予定は5月初旬、帰国は5月20日となっております。

最後に 本計画に当たり、海外登山基金からの多額の支援、また会員ならびに関係各位からのご支援、ご協力、ご指導を賜り、全隊員深く御礼申し上げます。 (中原 良材)

山の本の古書店

在庫目録年2回 (5月・11月) 発行
ご希望の方お申ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に！



古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

＊東海支部冬期ローツエ南壁登山
隊報告
尾上総隊長、田辺隊長、山本隊
員によりスライドによるローツエ
南壁登山隊の報告が行われた。

【監査報告】
別紙のとおり上半期の監査報告
がなされた。

③第2回雪崩講習会
別紙のとおり実施した。
黒川

②100周年募金状況
1月末日現在2056人・62
3万7千円である。会員全員のご
協力をいただきたい。

賛田

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆第24回日本登山医学シンポジウム開催

医療委員会

会期 5月29日(土)～30日(日)

会場 東京女子医科大学総合外来

センター(東京都新宿区河

田町8-1 TEL 03-3335

3-8111 FAX 03-52

69-7324

費用 5000円

テーマ 登山者支援にエビデンス

を求めて

特別講演 三浦雄一郎氏他

シンポジウム 8000峰登山

サポーターの科学

*その他、教育講演、シンポジウ

ム、一般講演を予定しています。

事務局 東京女子医科大学附属脳

神経センター神経内科・橋

本しをり(住所、電話、F

A Xは会場に同じ) shash

imo-fo@umin.ac.jp)

◆新入会員を対象とした

「徳本峠越えとウエストン祭」

山研運営委員会・信濃支部

58回目を迎えたウエストン祭。

新緑の徳本峠から上高地に入り山

荘に1泊、翌日「碑前祭」に参加。

新会員の仲間作りを手助けします。

日程 6月5日(土)～6日(日)

費用 1万2千円(1泊2食、午

餐会費、記念品、傷害保険

料を含む)

現地集合、解散

参加対象会員 平成15年4月から

平成16年3月末入会の新会

員および本会会員の希望者

20名(新会員優先)。

申込 5月15日までに住所、氏名、

年齢、会員番号、連絡先、

電話、メールを明記しF A

Xかメールで本田榮三郎宛

(TEL&FAX 045-845-13

041 メール ehonda@

nifty.com)

*申込者には詳細を送付します。

◆探索山行「南会津七ヶ岳の地形

の特徴とその成因を学ぶ」

日時 6月12日(土)～13日(日)

七ヶ岳の特異な山容を第1日目

に大嵐山から眺望し、夕刻の講演

会で近年確実になったその成因、

700万年前の地球のドラマにつ

いて学び、第2日目に七ヶ岳(一

等三角点)に登る。

講師 山元孝広氏(産総研・深部

地質環境研究センター)

交通 東京池袋より貸切りバス

宿泊 アストリアホテル(福島県

館岩村高杖高原)

費用 1万8千円(予定・宿泊、

バス代を含む)

定員 先着20名

申込 5月19日までに住所・氏

名・年齢・会員番号・連絡

先・電話をハガキかF A X

で向野暢彦宛(〒214-

0034 川崎市多摩区三

田2-15-9 TEL&FAX 044

1922-3403)

参考 二万五千分図で、七ヶ岳は

「系沢」、大嵐山は「湯の花」

*登山道には岩場がありますので、

ご留意のうえ申込を。

*申込者には詳細案内を送付します。

◆山本茂富個展「東風・西風」

会期 5月9日(日)～14日(金)

時間 11時～19時(最終日は18時

まで)

場所 竹川画廊(中央区銀座7-

7-7 TEL 03-3571-

ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーや
エクスペディションのアレンジまで。充実
度が違う「旅」のプランニングをこころがけ
ています。山旅などあらゆるジャンルを取り
扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030

大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111

名古屋/〒464-0807 名古屋区千代田東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

0320)

◆中村光吉展(油絵、写真)

会期 5月17日(月)～22日(土)

時間 11時～19時(最終日は17時

まで)

会場 銀座東和ギャラリー(TEL 0

3-3542-8662)

会員異動

物故

太田 繁 (3744) 03・6・5

長津葛尾 (4077) 04・1・15

福田泰次 (9468) 04・1・26

廣瀬由昌 (8586) 04・2・5

退会

